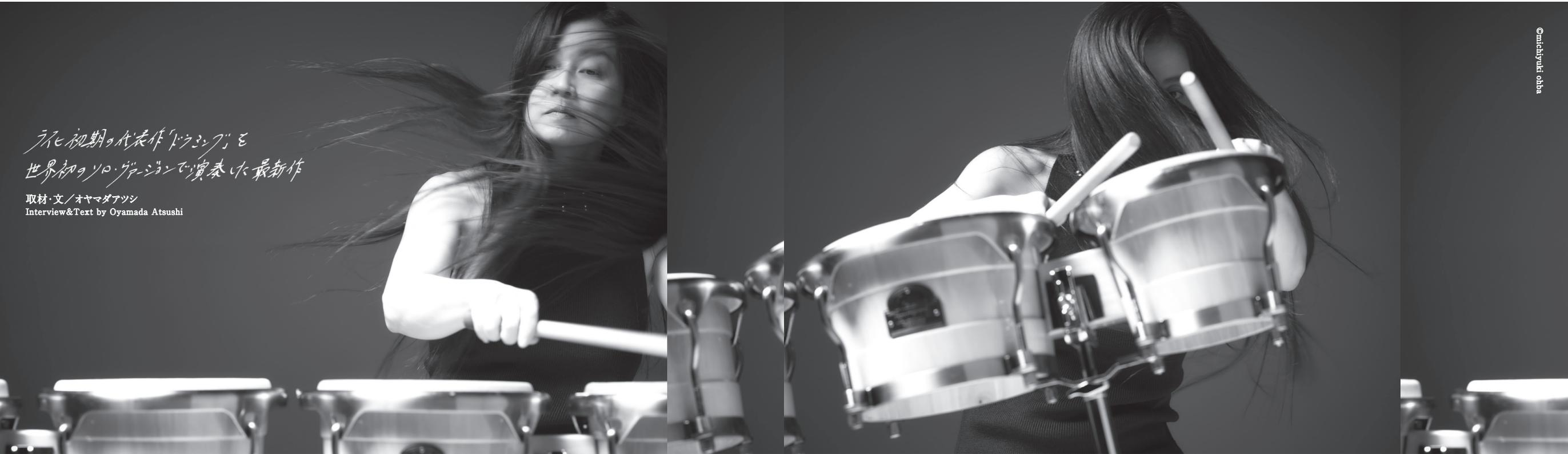


ライブ初期の代表作「ドラミング」を
世界初のソロ・ヴァージョンで演奏した最新作

取材・文 / オヤマダアツシ
Interview & Text by Oyamada Atsushi



クラシックから現代音楽にかぎらず、ロック・ミュージシャンほか幅広いリスナーが愛聴しているスティーヴ・ライヒの音楽。そのライヒから絶大な信頼を得て、通常は複数人によるアンサンブル作品を一人(多重録音)で演奏しているのが、パーカッショニストの加藤訓子だ。2枚目のライブ・アルバムとなるのが、全4部・演奏時間約70分からなる大作「ドラミング」(日本発売盤のみSACD ハイブリッド仕様)。またひとつ、新しい扉が開かれる。

「ドラミング」も
「カウンターポイント」も作品と月並み構成

1971年、つまり今からおよそ半世紀前の作品である「ドラミング」は、ライヒにとっても反復音楽というジャンルにとっても初期の大作であり、それまでアフリカのリズムを追究してきた彼にとっては、ひとつの集大成でもあっただろう。ライブでは12から13名で演奏されるが、加藤は声や口笛なども含む全パートを一人で演奏。その完成度はきわめて高く、プレイヤーの技量なども微妙に関係するライブとは異なり、理想的なスコアの再現によって抽出される音響やグルーブなどが体験できる。

「いつかはチャレンジしたい作品でしたが、ライヒ本人はライブであることにこだわっているだろ

うなと思いましたから、最初は遠慮がちに許可を求めました。ところがあつけないくらいに「ああ、どうせまた君が全パートを演奏して、そのうちのひとつのパートをライブで演奏するんだらう」とOKを出してくれたのです。以前にも彼の作品を演奏・録音したとき(「クニコ・プレイズ・ライヒ」)、アレンジや演奏についてはかなり濃密にやり取りをしましたので、信頼していただいているのだなと思いました」

全4部で構成されている「ドラミング」は、第1部がしっかりと調律された4組のボンゴ、第2部が3台のマリンバ(9人の奏者)と女声、第3部が3台のグロッケンシュピール(4人の奏者)と口笛にピッコロ、そして第4部は全員参加のフィナーレという構成。加藤自身もベルギーのアンサンブル「ICTUS」に所属していた際、ダンス・カンパニー「ローザス」との共演などで演奏に加わってきた。

「グループで演奏していたときは自分に与えられたパートのみを演奏していればよかったのですが、今回は作品全体を把握して全部のパートを解きほぐし、さらに音を重ねていく順番を考えるなどの工夫と試行が必要でした。その作業を進めるなかで気がついたのは、「ドラミング」も(カウンターポイント)の作品と同じ構成だったということです。アンサンブル全体をキー

ブする演奏者がいて、そこへ新しいフェーズのパターンを提示する第2の奏者がいて、さらに第3の奏者がまた新しいフェーズを提示して入ってくると、そこで新たな組み合わせが生まれる。全パートが揃うとビッグフェーズが起こり、一人を残して全員消えてゆく。その先また一人、二人と加わってきて新たな展開が始まります。複雑そうな作品も、じつはシンプルな構成の繰り返しだったり積み重ねていたりするのです」

しかし一気に演奏するライブとは異なり、レコーディングにあたってはどのパートから手を付け、どのように音を重ねていくかが気になる。

「まず最初に、アンサンブルのキーとなるガイドのようなパートを録音しました。基本のリズムやテンポをキープしているパートで、クリック(メトロノーム)の役目を果たしています。次にフェーズを提示して流れを作り出すパートを録音しますが、この2つのパートが全体のベースになるので、ここは何度もリハーサルを繰り返してかなり慎重に録音しました。ここがいびつになると、その後がすべてダメになりますし、逆にここをしっかり録っておけば音を重ねていくたび演奏は楽になるのです」

つまり複雑そうなスコアにも全体を支配していく主軸パートがあるため、そこを最初に押さえておくということである。「ドラミング」は現在、Boo

sey&Hawkesからスタディスコアが出版されているので、誰でも見ることはできる。しかし加藤は、あくまで最終的に仕上がる音とそのオリジナルのスコアどおりに表現されることを大前提として、何度も試行を繰り返し、取り組んだという。

「ドラミング」も
「ドラミング」も作品と月並み構成

さらにはボンゴも厳密に調律することが要求され、マリンバやグロッケンシュピールの音質・音色、マレットの種類などにもこだわって、全パートがクリアに聞こえるよう努めたという。たんにリズムの変遷のなかでグルーブを生み出すだけでなく、完璧に再現された状態だからこそ聞こえるパートもあるようだ。つまり、ライヒ自身が計算しつくして書いたスコアを再現するため、演奏者はかなり高いレベルで準備・演奏をこなさなくてはならない。演奏の統一性はもちろん、楽器(音色)のチョイスまでを一人の音楽家がプロデュースできることこそ、このプロジェクトの特徴だといえるだろう。

「たとえば第3部ではグロッケンシュピールの特殊な金属音が続くなか、ピッコロのラインなどはステージで演奏していてもなかなか聞こえてきません。そこで今回はヴィブラフォンと同じアルミ素材の楽器を使ってみたのですが、音程が

はっきりしていてピュアな音色が得られるという理想的なものになり、第4部の混沌とした音のなかでもキラキラと輝くような音が響くようになりました」

それぞれのパートは音をより明快にするため多くがモノ録音され、加藤の旧作でも見事な音楽空間を作り上げてきたプロデューサー&エンジニアの寒河江(さかえ)ユウジが、繊細な編集とミックスに腕をふるった。打楽器の多彩なアタックやエッジの効いた音、空間や奥行きなども含めてすべてがクリアに聞こえるのは、高音質で名高いイギリスのLINNレーベルだからこそ実現したクオリティだろう。

ところで加藤は、2018年1月26～28日にダレンサーの平山素子と組んで「ドラミング」を愛知県芸術劇場コミッションの作品として世界初演(録音作業は2017年から行なわれている)、その後も各地でコンサートを行ってきた。ライブでも当然ながら一人で演奏するのだが、どのパートをどのように演奏しているのだろうか。

「ライブのパート以外をすべて録音しておき、次に加わって新しいフェーズを起こす仕掛け役のパートを順に演奏しています。そのパートが完成され新しいリズムの組み合わせができると、そのうちにそのパターンがフェードインが入ってきますから、私のパートは徐々に音のなかに吸収

されていき、一度演奏を終了。そして次に新しいパターンでフェーズを起こすパートを演奏して、ふたたびアンサンブルに加入するというわけです。つねに新しいことを仕掛ける役を演奏し続けることとなりますね。これがカウンターポイントの楽曲の手法です」

コンサートでは今後も取り組んでいくことと、この面白さを体験できるチャンスもあるが、まずは録音で繰り返し楽しみ、ライブ特有のマジカルな音世界をじっくりと味わってほしい。

Profile

パーカッショニスト。桐朋学園大学研究科終了とともに渡欧し、オランダ・ロッテルダム音楽院を首席で卒業。ダルムシュタット国際現代音楽祭クラニヒシュタイン賞や第十二回佐治敬三賞など、数々の賞を受賞。英国スコットランドの高音質で知られる世界的レーベル「LINN」からCDをリリースする唯一の日本人アーティスト。パール楽器・アダムス社(蘭)グローバルエンドーサー。2018年10月、最新作「スティーヴ・ライヒドラミング」を発表。

New Album



スティーヴ・ライヒ:
ドラミング
(TMP-CKD-613S)